

読む・百人一首 021

素性法師

今来むと

言ひしばかりに

長月の

有明の月を

待ちいでつるかな

いまこむと

いひしばかりに

ながつきの

ありあけのつきを

まちいでつるかな

読む・百人一首 022

文屋康秀

吹くからに

秋の草木の

しをるれば

むべ山風を

嵐といふらむ

ふくからに

あきのくさきの

しをるれば

むべやまかぜを

あらしといふらむ

読む・百人一首 023

大江千里

月見れば

ちぢにものこそ

悲しけれ

わが身ひとつの

秋にはあらねど

つきみれば

ちぢにものこそ

かなしけれ

わがみひとつの

あきにはあらねど

読む・百人一首 024

菅家

このたびは

幣もとりあへず

手向山

紅葉のにしき

神のまにまに

このたびは

ぬさもとりあへず

たむけやま

もみぢのにしき

かみのまにまに

読む・百人一首 025

三条右大臣

名にし負はば

逢坂山の

さねかつら

人に知られで

くるよしもがな

なにしおはば

あふさかやまの

さねかつら

ひとにしられで

くるよしもがな

読む・百人一首 026

貞信公

小倉山

峰のもみぢ葉

心あらば

今ひとたびの

みゆき待たなむ

をぐらやま

みねのもみぢば

こころあらば

いまひとたびの

みゆきまたなむ

読む・百人一首 027

中納言兼輔

みかの原

わきて流るる

いづみ川

いつ見きとてか

恋しかるらむ

読む・百人一首 028

源宗于朝臣

山里は

冬ぞ寂しさ

まさりける

人目も草も

かれぬと思へば

みかのはら

わきてながるる

いづみかは

いつみきとてか

こひしかるらむ

やまざとは

ふゆぞさびしさ

まさりける

ひとめもくさも

かれぬとおもへば

読む・百人一首 029

凡河内躬恒

心あてに

折らばや折らむ

初霜の

おきまどはせる

白菊の花

読む・百人一首 030

壬生忠岑

有明の

つれなく見えし

別れより

暁ばかり

うきものはなし

こころあてに

をらばやをらむ

はつしもの

おきまどはせる

しらぎくのはな

ありあけの

つれなくみえし

べつれより

あかつきばかり

うきものはなし

読む・百人一首 031

坂上是則

朝ぼらけ

有明の月と

見るまでに

吉野の里に

ふれる白雪

あさぼらけ

ありあけのつきと

みるまでに

よしののさとに

ふれるしらゆき

読む・百人一首 032

春道列樹

山川に

風のかけたる

しがらみは

流れもあへぬも

みちなりけり

やまがはに

かぜのかけたる

しがらみは

ながれもあへぬ

もみちなりけり

読む・百人一首 033

紀友則

ひさかたの

光のどけき

春の日に

しづ心なく

花の散るらむ

読む・百人一首 034

藤原興風

誰をかも

知る人にせむ

高砂の

松も昔の

友ならなくに

ひさかたの

ひかりのどけき

はるのひに

しづごころなく

はなのちるらむ

たれをかも

しるひとにせむ

たかさごの

まつもむかしの

ともならなくに

読む・百人一首 035

紀貫之

人はいさ

心も知らず

ふるさとは

花ぞ昔の

香ににほひける

ひとはいさ

こころもしらず

ふるさとは

はなぞむかしの

かににほひける

読む・百人一首 036

清原深養父

夏の夜は

まだ宵ながら

明けぬるを

雲のいつこに

月やどるらむ

なつのよは

まだよひながら

あけぬるを

くものいつこに

つきやどるらむ

読む・百人一首 037

文屋朝康

白露に

風の吹きしく

秋の野は

つらぬきとめぬ

玉ぞ散りける

しらつゆに

かぜのふきしく

あきのは

つらぬきとめぬ

たまぞちりける

読む・百人一首 038

右近

忘らるる

身をば思はず

ちかひてし

人の命の

惜しくもあるかな

わすらるる

みをばおもはず

ちかひてし

ひとのいのちの

をしくもあるかな

読む・百人一首 039

参議等

浅茅生の

をのゝしのはら

しのぶれど

あまりてなどか

人の恋しき

あさぢふの

をのしのはら

しのぶれど

あまりてなどか

ひとのこひしき

読む・百人一首 040

平兼盛

しのぶれど

色にいでにけり

わが恋は

ものや思ふと

人の問ふまで

しのぶれど

いろにいでにけり

わがこひは

ものやおもふと

ひとのとふまで